

<発表>

21世紀における近衛篤麿の思想的遺産

中央大学教授 李 廷江

李 ご紹介いただきました李廷江と申します。本日は、辛亥革命 100 周年を記念する「辛亥革命・孫文・東亜同文会」のシンポジウムに参加することができて誠に光栄でございます。特に、来日後、大学院時代から今日まで、心温かく見守ってくださる藤井先生と御一緒にこの場にいることを大変幸せに思います。

今日のテーマは、「21世紀における近衛篤麿の思想的遺産」です。辛亥革命と日本、辛亥革命の源流を考える際、清末における日本と中国は、非常な大きな意味を持つものと言えます。すなわち、今までの研究にもありましたようにもし、もし清末の日中関係が無かったとすれば、もし清末の日本留学が無かったとすれば、あるいは清末の華僑、孫文と日本との関係が無かったとすれば、辛亥革命というものは無かったかもしれません。

近衛篤麿は、辛亥革命の源流に当たる明治時代の日中関係において、極めて重要な存在がありました。ここでまず近衛篤麿と中国との関係について考えてみたいと思います。

1つ目は、近衛篤麿と中国との関係について。すなわち彼と清末要人との関わりにおいてお話しします。2つ目は、近衛の对中国理念と政策について、検証することといたします。つまり近衛篤麿は中国との交流の中で一体いかなる考え方を持っており、またどのような行動をしてきたのかを明らかにしたい。3つ目は、近衛篤麿の思想的な遺産に述べたいと思います。遺産とは、一方近衛思想は現代のわれわれにとって、あるいは 100 年來の日中関係の中で、いかなる形で受け継いできたかの問題もあり、他方、それは遺産ではなく、寧ろ問題であり、大きな迷惑であるという両面的な内容を含んでいると理解し

なければなりません。

まず近衛篤麿と清末要人との関係について考えてみたいと思います。その前に、近衛の生い立ちとその生涯について極簡単に紹介いたします。近衛は貴族の家に生まれ、外国留学を経験して、帰国後直ちに日本貴族院の議員に選ばれ、その後学習院院長、帝国教育会会长と貴族院の議長にも就任しました。1898 年に東亜同文会を設立して、その会長に務め、その以外にも幾つか対アジア関係団体の中心人物として活躍しておりました。要するに、明治 30 年代以降の日本民間の対アジア関係の中で、指導的な立場に置かれた人物であります。1904 年に 41 歳の若さで亡くなりました。長男の近衛文麿は、後に内閣総理大臣になったのです。

さて、近衛と孫文とはどのような関係があるのか、また彼は辛亥革命とどのような関係はあるかについては、後ほど馬場先生より詳しくお話を聞くかと思いますが、近衛は孫文と直接会っていなかったけれども、お互いによく知っている間柄であります。

近衛と中国との関係について、いくつかの研究はあるものの、その全貌は、決して明らかにしたと言えません。確かに近衛篤麿と中国との付き合いは、時間的に短かったが彼の置かれていた立場と実際かかわっていたものは、多面的であり、大量的であるため、当時の日本、特に民間の様々な活動の中で彼はいかなる指導的な役割を果たしたのかについては、いまだに十分に解明しているとは言えない状況にあります。私自身は博士論文を書く段階で近衛篤麿関係の史料と出会いましたが、約 20 年前から京都にある陽明文庫に所蔵している清末中国の要人から近衛篤麿宛の書簡を整理はじめ、2003 年に

原書房から『近衛篤磨と清末要人』を出版しましたが、近々中国語版も出版することになります。

陽明文庫については、皆様がご存じの方もいらっしゃるかもしれません、昔日本の貴重な史料を収めている文書館であります。近衛篤磨文書もその中にあり、彼と中国との関係資料も多数保管しております。

これは昔私が資料を調べた時に撮った写真です。掛け軸は、張之洞が書かれたものです。1899年、近衛篤磨は中国を訪問した際、張之洞と会いまして、張にお願いして書かれたものです。山儀堂という。近衛と中国との関係は大変豊富で、大変深くて、書簡とその価値についてはこのような状況で、1960年代に日本の学者たち、私の大学院時代の指導教授の衛藤瀧吉先生も参加しておりましたが、『近衛篤磨日記』を編集した際、中国語で書かれた書簡については、読みづらい字もあったため完全に識別できないものがあり、また文章を間違って配列したものもありました。従って、これらの清末要人の書簡を近衛篤磨の对中国関係を研究する史料として利用する研究者は少なかったのであります。

そこで、私はこの100通ぐらいの清末要人の書簡を編集することにより、近衛篤磨と中国との関係を明らかにしようとしたわけです。これは私が衛藤瀧吉先生と共に出版した本の写真です。原書房から出されたものであります。

近衛に宛てた清末要人の書簡は、近衛と中国との接触の実態を反映し、当時の両国関係を理解する貴重な資料であります。これから、これらの資料を通して、近衛の対中活動を通して彼の対中理念とは何かについて検討してみたいと思っています。

第1点は、中国への関心と同人種連盟です。第2点は、当時の言葉で「支那保全」ということですが、すなわち中国保全と平和主義です。第3点は、中国改革支援と経済協力です。もちろん、この3点だけでは近衛の対中理念と彼のアジア理念全部を語る事はできません。しかし、こうい

うふうに整理したのもそれなりの理由があるのです。第一に、これにより彼の対中理念と行動が時系列で分かるわけです。つまり、近衛の中国への関心は、1898年1月に『太陽』雑誌に発表された「同人種同盟支那問題研究の必要」からスタートしたとすれば、1898年から1899年は第一期とします。それから、「支那保全」と平和主義とは1900年から1901年まで、それを第二期とします。更に第三期は、すなわち義和団事件前後の国際情勢の中で、中国は危険な状況に置かれておりました。それに対し、日本としてどう対応するかの問題です。それに対し、近衛によって打ち出されたのは、いわゆる支那保全、平和主義であった。その後近衛の健康状態はあまり良くありませんでした。

では、時系列で近衛が考えていた支那保全、清末中国の改革支援、及び経済協力などを検証してみましょう。まず中国への関心と同人種連盟についてです。これは、1898年1月1日の『太陽』に掲載された「同人種同盟支那問題研究の必要」というものです。この文書は、彼の中国への関心を表明し、中国へ積極的に関与する出発点でもあります。それから近衛周辺に中国関係者が集まり、彼自身も日本の様々な对中国团体にかかりわりを持つようになりました。またこの文書により、近衛を日清同盟の提案者と見なすこととなりました。理由として、同人種連盟の中で近衛は、日本社会にある中国蔑視の風潮を批判したり、東アジアが人種競争の舞台になることを予感したりして、日本人にこのような大勢の行方を注目するべきだと呼び掛けたからです。

次に彼が提案した日支同盟の内容について考えてみます。要点を4つほど挙げることができます。第一に、教育振興・人材育成。第二にマスコミの中国への関心。第三に日中間の相互理解。第四に中国研究の重要性の問題です。結局、これは日本社会の対中問題についての重要な問題提起であります。1つは対中問題、もう1つは対中関係に携わる日本人自身の問題を彼は強く意識しているわけです。中国との接点

は、改革派との出会いから始まりました。こここの書簡を見ますと、まず康有為との出会いおよび交流があり、そして康有為の書簡もあります。つまり康有為とも付き合いました。要するに1898年から近衛は梁啓超、王照、汪康年といった人達との付き合いがあったことを、この書簡から見ることができます。若い時の梁啓超と康有為の写真です。

その後、近衛は義和団前後の時に軍部の中国分割の気運が高まった中で、断固として中国分割に同意せず、あくまでも平和主義を堅持しておりました。近衛が当時書いた意見書が3つありますて、内容は支那保全の重要性を説明したものであります。

1900年6月18日、東亜同文会の晩餐会で対中政策について、中国分割を主張する人々は激しい意見を出しましたけれども、近衛は一貫して平和主義を実行する以外選択肢は無いと言ったわけです。そういう近衛の持つ対中イメージと対中政策は、彼が中国のさまざまな人の交流を通して得たものであります。ここに挙げました最初日本に来た亡命者との出会い以外にも、いわゆる南方有力者との交流もあったわけです。つまり義和団事件前の日付を見ると分かるように、1901年から1902~3年、近衛は中国の張之洞、劉坤一、といった人達とも付き合いをしているわけです。

近衛から見た中国は南方と北方の違いがあります。南方とは、ある意味では非常に柔軟性のある、改革というイメージがあります。それに対し、北方とは清政府を中心とする保守的であります。しかし中国全体のことを考えますと、南方を支援しながら北方との関係も維持しなくてはいけないと近衛も思ったわけであります。また南方との交流についてはさまざまな側面があり、近衛として非常に柔軟に対応しております。南方から日本への留学生を派遣することについては、彼は、積極的に協力しました。そのため、彼は張之洞と劉坤一と2回ほど訪問しまして、お互いに意見を交換して信頼関係を結びました。近衛はいわ

ゆる南方有力者との関係を重視したわけです。また中国人留学生について、一般に日本への留学を積極的に受け入れに協力すると共に、中国の軍事留学生にも協力し、湖北から湖南省、それから全国から派遣された軍人留学生を受け入れ、清政府からの日本の軍事視察にも協力しました。さらに彼は清政府貴族から張之洞の子弟、すなわち張之洞の孫あたりの日本留学を支援しておりました。その後、南方有力者の親族留学まで学習院大学を受け入れ皿としていわゆる清朝貴族の日本留学を推進したわけです。学習院大学に張之洞の孫を入れました。張之洞の孫張厚琨の留学生活保証人として以後まで面倒を見たわけです。

近衛の持つもう1つの特徴は、政府の要人と民間の対中国団体の指導者の二つの立場から、中国との関係及び中国との交流を極力推進したことありました。1902年以降、あるいはその前からもそうですけれども、基本的に中国の清政府と南方有力者と同距離外交を展開したことです。また清政府に反対している亡命者である康有為、梁啓超とも付き合いがありました。彼は、康有為と梁啓超と話した時、明治期の例を挙げまして、中国の改革は、急ぐべきではないという自説を述べました。すなわち改革が社会的、総体的な仕事である以上、徐々に進めていくべきだというような意見を繰り返し強調しました。

ここで一つ面白いことを挙げましょう。それは、なぜ近衛がこれほど中国に関心を持っていたのかという問題です。彼は、清政府皇帝への祝電があります。祝電とは、義和団事件以降西太后と光諸皇帝が西安に避難し、それから西安から北京に戻ったことへの御祝のことです。祝電は中国語で書かれたものです。ここで注目したいのは、「外臣」という署名です。つまり、外臣である日本国民同盟会会員近衛篤麿から無事に北京に戻った中国皇帝へのあいさつであります。その中で、東北三省を取り戻すことに対し外臣として感激した。そういうような使い方、私の知っている限り日本人で中国皇帝に対し外臣という

言葉を使ったのは近衛が最初ではないかと思います。その後、1915年の中華民国大統領袁世凱の法律顧問を務めた有賀長雄は、袁世凱に「外臣」という言葉を使いました。当時、有賀は袁世凱に対し「外臣」を使ったことで、日本社会から物凄く批判されました。

しかし、この祝電は外部への発表ではなく、また近衛だからこういう言葉を使っても批判されなかつたかもしれません、詳細は分かりません。しかし近衛はどういう心情で、あるいは近衛の部下が、近衛に無断に使っていたかもしれません。不思議に思います。

近衛は、中国との経済関係を非常に重要視しておりました。清政府要人との接触、交流には正にこのような一面を反映したものです。ここに挙げましたような、袁世凱を始めまさに清政府の要人達との交流がその後の彼の仕事の重点になりつつあったとも言えます。彼は亡くなるまでこれら清政府の要人と交流を絶えることなく、日本政府の誰よりも幅広くいろいろな中国から来た人たちと会って、意見交換したりしてきました。最近言われている清末新政を推進する過程において、日本モデル、日本人顧問及び日本視察にきた中国各界の人たちに対し、懸命に日本のことを見紹介していました。

对中国経済関係を推進する意義で、東亜同文書院の卒業生の就職状況を考えるとわかります。卒業生の多くはビジネス及び对中国経済活動に従事しているという事実です。これは第1期の1904年から37年、東亜同文書院卒業生の就職状況の統計ですが、これを見ればビジネス、経済仕事に勤める人が非常に多いことが分かります。

これは近衛外交についての資料です。近衛篤磨と中国関係の写真です。これら全ては東亜同文書院の本の中から引用されたものです。

では近衛と中国、また近衛が残した思想的な遺産について、基本的に3つの面から見るべきではないかと思います。1つは辛亥革命における遺産。2つ目は日中関係における遺産。3つ

目は国際社会における遺産です。

辛亥革命と日本をどういうふうに見ることができるか。今年は、辛亥革命百周年を迎えた。日本と中国では、辛亥革命と日本との関係がさまざまな角度から検証されてきました。明治維新は辛亥革命の第1歩である。辛亥革命は明治維新の第2である。日本は辛亥革命の海外根拠地の1つである。多くの日本人が辛亥革命に参加し、支援した。辛亥革命は清末新政の結果でもあった。そういう風に今の人たちは、見てきたわけです。

辛亥革命と近衛との関係について考えるとき、結果論の意味から言えば、近衛は清末中日交流の推進であり、清末中国人の日本留学の推進者であり、清末の中国における改革の協力者でもあると言えることがあります。また近衛こそ孫文に大きな影響を与えた日本人の一人ではないかと思います、この写真は康有為の書簡です。康有為の書簡から分かるように、すなわち、近衛は、いろんな中国人と付き合うことにより、結果的に在日中国人の中で辛亥革命の基盤を準備したこととなり、留学生の多くは辛亥革命に参加した面においても、更に中国各方面において、日本から多大な影響を受けたため、結果的に辛亥革命を支援することになったと言わなければならない。更に孫文の近衛へ深い敬意をもつ事実から同時代の中国改革者の中に近衛の存在と影響は、極めて巨大なものであると言う事あります。辛亥革命と日本を考える際、近衛抜きにして語ることはできないという意義は、ここにあつたとのことです。

日中関係における遺産について以下の三点を挙げることができます。第一に日本における中国語の学習を推進すること、第二に日本人の中国研究を強化すること、第三に中国人の日本理解の日本研究を支援することあります。つまり教育を重視し、日中交流人材の育成に力を入れることです。近衛は創立した東亜同文会と東亜同文書院がありますが、まさに今の愛知大学そのものは近衛が残された遺産の1つと考え

ても決して言い過ぎではないでしょう。中国に対する認識や彼の日中関係理念は決して多くはありません。また決してすべては現在に通用できるものではありません。しかし、そこにある平和思想と日中の理解互恵の思想は、近衛の思想的遺産として百年後の現在において大いなる意義があると言えるでしょう。

では現代社会における遺産については、主として経済連合と地域連合を推進すること。経済協力を推進すること。またアジア主義の実現を目指すことの三点であります。これは近衛と孫文と同文会に関する記事ですが、ちょっと現物を探す時間的余裕が無くて、これは数年前に亡くなりました中村義先生が書かれた本です。『白岩龍平日記—アジア主義実業家の生涯』というものです。近衛が推進していた対中経済事業について、詳しく書かれております。ある意義では、白岩龍平は近衛篤磨対中国経済推進の思想を継承してきた実業家です。これは孫文の書簡ですが、後ほど馬場先生が多分お話になりますから、ここでは省略いたします。要するに 21 世紀の今日、日本と中国、また東アジア社会に様々な動きの中、様々な考え方の中に、我々は近衛の存在と影響と思想を実感できたではないかと思つたわけです。

実は、孫文も近衛の思想的な影響を受けました。1901 年 12 月 20 日に発行された、近衛が会長を務めた東邦協会の『東邦協会会報』第 82 号に孫文逸仙の名前で「支那の保全・分割について合わせて論ず」が掲載されております。この文章から、近衛の影響を充分読み取ることができます。支那保全とは、近衛の持論であります。従来、孫文のアジア主義思想について、日本の桂太郎との関係がよく議論となりましたが、思想的な源流から考えればむしろ近衛篤磨から来たものではないかと思ったわけです。近衛篤磨が早く亡くなつて 100 年以上経ちましたけれども、辛亥革命は百年になりました。孫文は、亡くなる前に「革命は未だ終えず同志はなお努力すべきだ」の遺言を残しました。ある意味では、孫文の

遺言は近衛篤磨が現在のわれわれに残された遺産・遺言ではないかと思います。

私の話を終わります。どうもありがとうございました。

司会 李先生ありがとうございました。フロアから何かご質問ございましたら。馬場先生。

馬場 どうもありがとうございました。李先生に近衛篤磨と、東亜同文会の前期のほうをお願いして私はその後を、ということで分業するつもりでおりました。ということをまず最初に申し上げて、ちょっと質問をさせていただきます。1つは先ほど中国の改革への支援とおっしゃいました。その場合に私は近衛篤磨自身東亜同文会、あるいは東亜同文書院を分けて考えていますけれども、支援という場合に、梁啓超や康有為などのグループ(変法派・立憲派)と、それから清朝が 1901 年以後光緒新政になって上からの改革をやつた。それをちょっと分けて考えるべきではないかと思うんですね。それでたとえば先ほど王照の話をされてましたけれども、このあと武井さんの話に出てくるかと思いますが山田良政が戊戌政変の時、王照を日本に亡命させるのをちょっと手伝つてゐるんですが、そのあと日本では実は東亜同文会が、結局こういう連中に日本から出ていってほしいということになったわけですね。それでそのあとは言わば清朝内部の改革派と言いますか、張之洞や劉坤一の場合は新政の前から付き合いがありました。そういうふうな清朝の新政時期の改革に対しては非常に東亜同文会が支持をしていた。ただ梁啓超達のグループに対しては新政の時期にはやっぱり距離を置いてたんじゃないかと私は考えておりまして、では近衛自身はどうだったのかということをちょっと聞かせていただければと思います。

2つ目の経済協力ということで、具体的に東亜同文書院の例を挙げられたわけですけれども、卒業生は確かにビジネスのほうで活躍している。それはその通りです。日中の貿易活動・通商活動を盛んにして中国の分割を保全する。そういう

面と、東亜同文書院が言つてることで中国と通商活動をやる時、これは日清貿易研究所からの継続でもあるんですけれども、買弁を使わずに直接中国と取引する人材を養成したいと。そこで出てくるのは日本の商権ですね、中国における商いを確立する側面があるのではないか。つまり通商活動を盛んにして中国の分割を阻止する経済力を養成するという側面と、同時に東亜同文書院ができる前、あるいは日清貿易研究所ができる前には中国との貿易のエキスパートがないわけですから、そういうものを養成しながら日本の商権を確立する。そういう側面もあるんじゃないかというふうに私は考えています。その点について近衛はどうだったかということをお聞かせいただければと思います。以上です。

李 どうも有難うございました。馬場先生から2つとも重要な問題を指摘しました。あとのほうからお答えいたします。商権問題は極めて重要です。私自身も近代日本の対外進出において商権は一つ重要なテーマであるとずっと考えておりました。近衛も当然そうだった。それは、近衛を含む当時の日本人のほとんどが当然ではありますが、まず日本の国益を考えるわけです。それを前提に、中国支援やアジア支援を計画し実施してきたわけで、日本のためにアジアと良い関係を作る。その中で、近衛も商権の問題を意識していました。私が日本の近代史を勉強する過程で調べた多くの日本人の対外問題について、共通していたのは「財政」ということ。軍人にとっても、近衛にとっても、やっぱり財政をちゃんとしないとも言えない。この商権の問題はその一つです。経済については、あえて協力という意味で今日の話を進めておりましたけれども。たとえば白岩龍平は進めていた蘇州開発と湖南開発などさまざまな経済活動の原点は、やはり日本の商権を確立し、展開したいという点を指摘すべきだと思います。近衛篤麿は白岩龍平のよき理解者であり、最大な協力者であります。

さて、第1の質問については、私はむしろ近衛が梁啓超、康有為との交流から次第に広範囲で

中国各界の人々との交流を進めていたではないかと思います。最終的に清政府高官と交流をした。それから南方有力者や、清政府及び色々な立場の異なる人、たとえば梁啓超達と交流があつたが、近衛からはうまく距離を置いたのです。中国内部の状況をどこまで把握していたが不明ではありますが、かなりうまく対処していると思われます。実際、近衛は南方革命派を支援するも広州に行くとき革命派にあえて会わないというエピソードもあったという。中国に協力すること、中国改革を支援することは革命派・改革派・清政府を問わず彼は良いと思っていた。最終的に彼は1902年頃には病弱になり、体力的にちょっと無理な時期に入ったので、彼の一貫性、全体像を描くにはかなり難しい問題が出てきたのではないかと私は理解しています。

司会 あともう1人ご質問を。はいどうぞ。

大里 神奈川大学の大里です。つい1週間前、李先生と一緒に神奈川大学でシンポジウムを開いています。今日はゆっくりと李先生のお話を伺うことができました。近衛篤麿について、非常に立派な人であった、中国に対して大きな貢献をしたということはよく分かりました。その内容について1つ2つご質問をしたいと思います。馬場先生のお話にあった時期的に違いがあるというのは私はむしろ反対で、李先生のお答えのほうが実際ではないかなというふうに感じます。つまり1898年に東亜同文会ができた頃というのは、まだ中国改革という点では孫文が目立って革命派を名乗っていたというわけでもなくて、いろんな人がその後便宜的に改良派とか革命家とかその他名付けますけれども、その時期は腐敗した清朝の現状を批判するいろんな考え方の人が各地にいた。もっと広げれば清朝の官僚の中にも清朝の現状を批判している人もいた。

そういう人を含めて先ほどの李先生のお話ではありませんが、南方有力者との交流というのを近衛篤麿さんは重視した。近衛篤麿の下でと言うか東亜同文会員が活躍するその前に、中国で調査活動をしたりして情報を集めている中国通

の人がいて、そういう人達が同文会にかなり参加する。その人達の行動も、さっき名前が挙がった張之洞など南方の有力者にも当たるような、非常に幅広い中国改革を目指す行動をやっていたわけです。その意味で言うと近衛さんの考え方を実践したとも言える。ただその近衛さんの下でやっていた同文会員達の中には、唐才常なんかが1900年 の武装蜂起を準備して失敗するわけですけれども、それに挺入れをしてやろうとする人達もいて、近衛さんの言う平和主義よりもっとはみ出した形の行動をとろうとした面もあるわけですよね。だから近衛さんが清朝高官に会った時にもそういう人物達は付き合っているわけで、近衛さんのコントロールと言いますか、その辺が必ずしも利かない面があったのか、それともそういうことを含めて東亜同文会の活動があったのか。近衛篤麿は辛亥革命に至る前、もっと混乱しながら孫文達が中心になって革命をする前に亡くなっているわけですが、私が思うには東亜同文会というのは近衛さんの影響を受けて、改革を広い意味で捉えてそれにどうコミットするかというふうに考えていた集団ではないか。従って辛亥革命後にはなかなか中華民国への変化に付いていけない。それで東亜同文会員の中でもいろんな意見が存在したのではないかと。まあ私の意見を言いましたが、李先生は今私がお話ししたようなことをどう思われますか。

李 ありがとうございます。これも難しい問題で基本的におっしゃることに賛成します。という是有る意味では東亜同文会は近衛のグローバル的な夢を実践してきた団体であると評価します。もう1つ、そこにどうしても時代的な制限、近衛なりの日本のための行動がどうしてもあると私は見ておりました。資料を読む度に唐才常の時、近衛の態度ははっきりしておりますし、あるいは康有為の外国退去の問題についても、近衛は、日本の国益のためならば、一切躊躇することなく、これらの革命派や改革派にほとんど同情の気持ちは無かったように見え、冷徹そのものであります。まあそれは時代的制限で、もちろん評

価できませんが。

それから、私はしばしば近衛篤麿と渋沢栄一との比較をしたくなります。二人は、職業的に異なるが对中国関係について、多くの点で似ているではないかと思います。また日本を支える、日本を建設するために一生懸命仕事をしているとともに、他方日本のためにも、アジア・中国に関心があって、積極的に様々な事業に関与し色々な人々や色々な仕事と関わってきました。近衛は若くして亡くなつたけれども、もし彼があと10年か20年か、或いは30年長生きできればどうなつたか、全く想像もできません。しかし、私はグローバル的な面で、日本一国の立場を超えた、一国の国益を超えた面での彼の存在と役割を評価します。それから、彼は中国の状況を考えた時に南方と北方の違いを指摘し、意識して行動したのは、やっぱり当時でも現在でも優れたところかなと評価したいのです。

司会 時間の関係で李先生の発表はここまでで終わらせていただきます。10分間休憩し、3時10分から再開いたします。李先生ありがとうございました。